
妖の世界 男主人公側

霜月サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖の世界 男主人公側

【Nコード】

N2038BA

【作者名】

霜月サヤ

【あらすじ】

忘れてはいけない前世の記憶…そして現在……交わる過去と今

もう一つの『妖の世界 女主人公側』と平行して読むと、より楽しめます。

また、この作品はサイトに掲載されているものです。感想ありましたら、よろしく願います。

はじめに(前書き)

まずは読んでください

はじめに

こちら『妖の世界 男主人公側』では、男主人公をメインに話が進んでいきます。

なので、もう1つの『妖の世界 女主人公側』と平行して読むと、より楽しめます。

また、この作品は名前変換機能を利用できる場所にて、作者が書いているものと同じです。

ベースは『ぬらりひよんの孫』ですが、他作品が交わります（主に、魔法系）。

男主人公側では、女主人公側とは違い、恋愛要素的なものが入りません。

また、シリアス的なものが女主人公側より多くなっておりしますので、注意してください。

設定（前書き）

『妖の世界 女主人公側』と共通です

設定

女主人公

名前：櫻井 有紀

通称：ユキ

年齢：12歳（中学1年生）

誕生日：12月02日

髪色：黒

目の色：黒

一人称：私

口調：乱暴な言葉遣いはしない。だけど、怒ると変わる。
服装：学校や外に出かける以外は、普段着物。

呼び方

・光輝 お兄様、コウ兄様

・両親 お父様、お母様

・リクオ 小学時代は奴良君、リクオ君

・ゆら 花開院さん

男主人公

名前：櫻井 光輝

通称：コウ

年齢：15歳（高校1年生）

誕生日：10月02日

髪色：銀

目の色：銀

一人称：俺

口調：時と場所を考えて、変えて話す。

服装：普段は着流し。羽織の色は、象徴の水色にしている。

備考：櫻井家の現当主であるが、学校にはアルバイトと偽って、学校側に話している。

呼び方

・有紀 ユキ

・両親 父上、母上

・リクオ リクオ

・ゆら 陰陽師、陰陽少女

その他

・父親

銀の髪で銀の目。まだまだ若く見られる。櫻井家の前当主。

・母親

黒髪黒目。外見と実年齢が釣り合わないじゃないかってくらいの美人。

・祖父

すでに他界している。

櫻井家の中では、異例の長寿だった人物らしい。また、過去にも詳しくかった。

・シロ

光輝の使い生物。

どんな生物なのかは、依然謎で、喋ったり飛ぶことができる。

・クロ

有紀の使い生物。

シロと同じだが、体の色がちょっと濃い。

・彼女

櫻井家当主の部下。

得意分野が情報収集のため、主な仕事は情報収集の活動である。
名前は、愛梨^{あじな}峻。

第零章（前書き）

小学校時代です

第零章

いや

ダメだ　ダメだって言っているだろう！

いくら我が一族の血でも　様はもう

第零章

「はぁ……はぁ……」

まただ。また、あの夢を見た。

「ふうう、とりあえず、だ」

「光輝様〜、有紀様〜！お時間ですよ〜」

家にいる使用人が俺たちに言っている。

「行くか」

背伸びをし、部屋の外に出る。

「「おはようございます、光輝様」」

「ああ、おはよう」

きくと、いや絶対、同じ対応になっている善のユキの元へ行く。

「おはよう、ユキ」

「あ、ユウにいまま〜」

ユキは、俺に気が付いたのか、飛び出してきた。

「挨拶は？」

「あ…おはようございます、おにこさま」

「よし、行くか」

「…」

「おはようございます、父上、母上」

「おはようございます、おとうさま、おかあさま」

「ああ、おはよう」

父は、櫻井家の現当主である。

「おはよう、コウ、ユキ」

「朝食でございます」

使用人の声で、俺たちの朝食が始まる。

「いただきます」

気持ちがいいくらい、綺麗に八モった。

朝食が食べ終わり、学校に行く。

「それでは、行ってきます」

「行ってきます！」

それが俺たち、櫻井家のいつもの日常である。

第一章（前書き）

原作1話分の為、めっちゃ長いです

第一章

時は満ちた

さあ、始めよう

新たな歴史を

第一章

「おにいさま、今日は遅いのですか？」

「ん？…いや、今日は遅くない。一緒に帰れるよ」

「やった〜！」

ユキの喜ぶ声が、何よりも幸せを感じられる。

しばらくし、バスがやって来た。

「おはよう、カナちゃん、奴良君」

ユキの声が出ているが、俺は本に集中しなとな。

「おはよう、ユキちゃん」

「おはよう」

上から家長カナ、奴良リクオ。特に、奴良リクオに関しては、櫻井家一族である俺は、学年が違っても、無関係ではいられる訳にはいかない。

「わー、すっごい大きな家」

「奴良君ち？うっそー」

前方の席に座っている子達が言っているが、当たり前だと思っ。

「（なんせ、魑魅魍魎の主である、ぬらりひょんが住まう家だからな）」

そんなことより、今読んでいる本の内容を覚えないと。

そう思えば、胸元にぶら下がっているペンダントが、少し熱を持った気がした。

授業なんてものは、俺にとっては暇な時間。

授業内容のことは、既に家で習ってしまっているからだ。

それでも、ノートを書かないといけない。ノート提出とかあった時のために。

『（……さま…コウじいさま…）』

ユキの声がした。

「（どうした、ユキ？）」

と聞いても、なんとなく想像はできる。

『（自由研究の授業で、ちょっと気分が悪くなることがあったので、
本日は保健室におります）』

ユキの言葉は、ある意味、報告でもあった。

「（そうか…わかった。放課後、迎えに行くよ）」

『（ありがとうございます、おにいさま）』

そして、ユキとの会話は終わった。

「（あのユキが保健室に、か…）」

きつと、教室で何かあったんだろう…。

でなければ、保健室に行くなんてことにはならない。

「（とにかく放課後、ユキから話を聞かか）」

放課後

「ユキ、迎えに来たよ」

「あ、おにいさま…」

どうやらホントに、保健室にずっといたらしい。

「全く…、訳を聞くからな」

「はい…」

ユキが話す内容…。

それは、人間が妖怪をどう見ているかってことだった。

「……なるほどな」

それが現代での一般的な捉え方だ。

それを知ってしまった、奴良リクオがどう反応してしまうのか、わかってしまう。

「（それは、奴良組にとって）タイミングが悪すぎる……」

俺が呟いてしまった言葉の意味がわからないのか、ユキの表情はハテナマークを浮かべていた。

「「ただいま」」

「お帰りなさいませ、光輝様、有紀様」

「父上は、いつものところにいるだろ？」

「はい」

「じゃあ、ユキ」

「なんですか？」

「俺は、父上のところに行くから」

「わかりました」

そのまま俺は、父上のところに向かった。

「父上、光輝です」

「ああ、入りなさい」

「失礼します」

父上の前に座る。

「光輝。お前も今日は、一緒に行くぞ」

「奴良組の総会、ですよね」

「そつだ。櫻井家と奴良組は、共闘関係にあるからな」

「それは、存じております」

「では、早速行くぞ」

「はい」

そして、父上と俺は家を出た。

道中、父上に本日の学校での出来事を報告した。

それを聞いた父上は、どうやら俺と同じ考えに行ったらしく、表情が少し渋くなった。

俺たちは部屋の隅にいる。

父上曰く、あくまで共闘関係であって、人間である者が共にしない方が幹部らにいいってことらしい。

しばらくし、総大将ぬらりひょんとリクオが入ってきた。

リクオには、戸惑いの表情が見れる。

「しかし最近は大メじゃな…。人間がまったく妖怪をおそれなくなつてしまつてな…」

「古いかのう…」

「とはいえ璞町の火事…。あれはワシの悪事ですぞ」

「なに？ごぞんじない？
いやいや拙者も先日…」

「まあしかし、悪行といえは…
ガゴゼ先生でしょう」

とまあ、一言で言えば、悪行自慢大会だ。

「おお、総大将！」

「やあやあ、くくろっ。」

どうじゃい？みんな最近、妖怪を楽しんどるかい？」

「へへへ…。シノギは全然ですな」

「ところで総大将。今回はどういった？」

「うむ…」

そろそろ…三代目を決めねばなと思ってなあ」

ニヤツとして、総大将は言った。

「おお…それはよいですなあ。」

二代目が死んでもう数年…。いつまでも隠居された初代が代理では…おつらいでしょう…」

ガゴゼが言う。

「（嫌な妖怪だな…。この妖怪、良からぬことを考えている…）」

俺の率直な考えだ。

「総大将！」

悪事ではガゴゼ殿の右に出る者はおりますまい！」

「なんせ今年におこった子供の神隠しは…、全てガゴゼ会の所業ですからな！」

「いやいや…。」

大量に子を地獄に送ってやるのがワシの業ですから

「いやー、さすが妖怪の鑑ですなー！！ハハハ」

それらの言葉を聞いて、リクオの様子がさらに変わる。

「（俺にとっては、アホくさい話だな…）」

「フン…」

木魚達磨は鼻で笑った。

「なるほどのう。」

あいかわらず、現役バリバリじゃのう、ガゴゼ……」

「おまかせ下され……」

「だが…お前じゃあダメじゃ。」

三代目の件…このワシの孫、リクオをすえようと思っとな

「!?!?」

「な…なんじゃとお……」

「なんとっ…リクオ様とは………」

「まだ幼い子供ではござらぬか……」。

たしかに…総大将の血は継いでいるが……」

戸惑いだす幹部ら。

「どうしたガゴゼ…
顔色が悪い」

木魚達磨がガゴゼに言った。

「そっそんなことはないぞ…木魚。……………」

ガゴゼは慌てて言う。

「じいちゃ……………」

「どうしたリクオ…よろこばんか。
お前が欲しがったもんじゃない」

リクオの変化に気づいていない総大将。

「え」

「ワシの血に勝るものはない。お前はワシによく似てる。本家の奴らもそれは十分承知。
さあ採決を取るうではないか！！リクオ…お前に継がせてやるぞ！

奴良組72団体：構成妖怪一万匹が今からお前の下僕じゃ！！」

「い…いやだ！！」

リクオは否定の言葉を出した。

「何？」

「こ…こんな奴らと一緒になんかいたら、人間にもつと嫌われちゃ
うよー！！」

「リクオ…？」

「妖怪が…こんな悪い奴らだって知らなかった！
おじいちゃんになんか、ぜんぜん…似てないよー！！」

「あ」

そのまま外へ走り出すリクオ。

「こりゃ、リクオ」

「（あーあ、やっぱりタイミング悪いね…）」

「リクオ…」

「……………総大将……………」

失礼ながらリクオ様は…本当に血のつながりがありますか…？」

疑問を出したのは、奴良組相談役である木魚達磨だ。

「姿、形はもとより、考え方もまるで人間ですなあ……………」

その言葉に黙る総大将ではない。

「アーン？」

だが総大将も、リクオのまさかの否定に戸惑っているのだろう。

もうなんか、面倒くさい。だから俺は、父上にそつと言っ。

「俺、リクオを追いかけます」

「…ああ、行ってこい」

許可も出たことなので、飛び出したリクオを追いかけることにした。

「あ、光輝様」

リクオの側近である雪女が声を上げた。

「リクオ」

「あ…櫻井さんのお兄さん…」

「嫌いになったか、妖怪が」

「それは…」

「まあ、全ての妖怪を好きになれ、なんてことは無理だ。人間にだって、好きな奴や嫌いな奴はいるからな」

「……」

「だから、さ。リクオ自身で“答え”を見つけてよ」

伝えたいことを言った俺は、そのまま去った。

「おにいさま、今日も一緒に帰るのですの？」

「ああ、というより、今日は気になることが起こりそうなんだ」

「あ、アレは……」

ユキは指したのは、リクオとカナの姿だった。

カナは、バスへ向かっていった。

「奴良君！」

「うわぁっ」

「さすがに後ろから声をかければ、誰だって驚くだろ、ユキ」

「エへへ…。」

奴良君は、バス乗らないの？」

「乗らないよ」

「お前、昨日のこと、まだ引きずっているのか？」

「……」

「まあいい。昨日、俺が言ったこと忘れるなよ」

「おにいさまが何を言ったのか、ご存知ではありませんが、無理しないで下さいね」

「じゃあな」

「では」

後ろの席に座っているカナとその隣の子が話をしていた。

「ね…ね…奴良君じゃないけど…あの伝説って…続いているらしいよ
」

「え…何が…」

「だから…妖怪ー？」

何人も子供が神隠しにあっただって！

ちようど…このあたりで…」

「や、やめてよ〜」

その会話を聞いていた俺は、一段と警戒心を強める。

この会話の妖怪の正体など、昨日の総会で判明しているのだから。

「おい！！君たち！！待ちたまえ！！」

妖怪など実際にはいない！！ボクが研究で…」

「！！すぐに、背を下げるッ！！」

一瞬だが、窓に妖怪が見えた。

あの妖怪は、やはりガゴゼ会の…。ならば、衝撃が来る、すぐに。

「キャアアアア…」

俺が声を張り上げた後すぐに、バスに衝撃が走った。

「…………ユキ…………ユキ、大丈夫か？」

「う…………お、にいさま…………？」

ユキは、うつすらと目を開けた。

「腕…………出して」

「腕？」

「血、出ている。治すから」

「おにいさまがやらなくても、私自身が…」

「お前だと、敵にバレる。お前はまだ、血の力加減が不安定だ。だから、俺がやってやる」

「はい…」

有紀は素直に、光輝に腕を出した。

光輝は、有紀の血が出ている箇所を手をかざした。

すると、ポウッと光り、有紀の傷を治していった。

「ふう、さて、俺が乗っているのを知っていた、知らなかったに関わらず、あの妖怪には懲らしめないとな」

「お、おにいさま…？」

「ユキは、気にするな」

「……………」

ユキは、何か言いたそうだったが、俺は、行動を起こした、ガゴゼを懲らしめるため、あえて無視した。

「キャツ!！」

「い、家長くん!?!
ビックリするじゃあないか……」

「だ…だ…だ…
そこに…人が…並んでたから……」

「人？」

島が懐中電灯を照らす。

「な…なんか…、おかしくないか…?」

「清継くん…アレ何…?」

「え…さ、さあねえ…」

戸惑う三人。

「ち…けっこう生き残ってんじゃねーか」

「ヒッ!？」

「ど…どなたさまですかあー!？」

怖がる三人。

「あんまりトンネルがこわれなかったようだな…
とにかく…ここにいる全員…『皆殺し』じゃ。
若、もろともな…ガガガ…」

ガゴゼが言った。

「ひ…」

「ああ…こっちへ…」

「よ、妖怪……………ッ」

清継が遂に叫んだ。

「ふーん、そういふこと」

「だ、誰…?」

「だけど、お前ら。若狙いだっただとしても、俺がいたことを忘れて
いるなんて、余程死にてえーのか？」

「あ、ユキちゃんのお兄さん…」

「アヤツを殺れー！」

「…………バカが」

光輝は、刀を振る。

光輝へ向かっていたガゴゼの手下は、一瞬にして消えた。

その時だった。

音をたてて入ってきたのは、奴良組本家の妖怪たちだった。

「!?!?」

「おほ……………見つけましたぜ、若ア。
生きてるみたいですねー」

「（奴良組本家の妖怪……………ならば安心だ）」

光輝は、胸元にあるペンダントを触り、刀をしまった。

「……………ガゴゼ、貴様……………なぜそこにいる?」

中央にいる少年が問う。

「ガ…ガゴゼさま…」

「本家の奴らめ…」

「こ…今度は何ー？」

「そ…そんな…こんなあ…」

「なんだよー、清継くんー」

「わ…わからん…」。

「こんなの…何かの間違いだあー！！！」

「うるさい、静かにしろ」

一刀両断に言う、光輝。不機嫌はMAXだ。

「よ…よしよし、もう大丈夫だよ」

「やめる。おめーらは、顔コエーんだから」

「へ…へイ若…」

「よかった…無事で」

「当たり前だろ、俺がいるだから」

光輝は、少年の正体が誰か、わかったらしい。

「そうだったな…」。

カナちゃん、怖いから目つぶってな」

そのまま少年はガゴゼへ向かう。

「…？誰…？？」

カナにとっては、誰なのかわからない。

「……おにいさま、あの少年は、もしかして…」

「ああ、若頭だよ」

「やっぱり…」

有紀と光輝が会話している最中に、どうやらリクオはガゴゼの元に着いたらしい。

「私は…ただ人間のガキ供を襲っていた……それだけだが…？
何の…問題もないはずだろう…」

「ガ…ガゴゼ…!!」

ガゴゼはあくまでシラを切ろうとしていた。

「子供を殺して大物ヅラか」

「!?!」

「オレを抹殺し、三代目を我がモノにしようとしたんなら…」

ガゴゼよ、てめえは本当に…小せえ妖怪だぜ」

少年　　リク才は、言い切る。

「なんだあゝ貴様は」

「！？待て…その方は」

木魚達磨が止めの声を出す。

だが、ガゴゼの手下の手が触れることはなかった。

「リク才様には一歩も近付かせん。
ガゴゼ会の死屍妖怪どもよ…」

「てめ…」

「！なっ…！？」

止めていたのは、首無だった。

「絡新婦けしむすめの糸と毛倡妓けいぢの髪をよってあわせた特製の糸だ。動けばさらにしめる！」

「なめるなああ」

首無の警告を無視して動く。ゆえに

「ああああ……」

糸によって殺られた。

「な……」

「じじじら……」

「こいつがリクオ……だと……？
生きていたのか……お……おのれ……
くそっ……！！殺せ！！この場で……若を殺せ！！
ぬるま湯にそまつた本家のクソどももろとも！！全滅させてしまえ
！！！！」

「若……！！」

「力仕事は……」

「突撃隊長、青田坊にまかせてもらおうか……！」

「貴様一人ではないぞ、突撃隊長は……っ！」

「な……」

次第にガゴゼ会の者は殺られ、ガゴゼ一人となった。

「こ……こんなバカな……」。

私の組が……そんな……誰よりも……殺してきた……最強軍団なのに……」

「ガゴゼ。妖怪の主になろうってモンが

人間、いくら殺したからって……自慢になんのかい」

「っ……」

「あきらめろ。この企み……指つめどころじゃすまされんぜ」

「く……。ん？」

ガゴゼの目がカナたちに行った。

カナたちも、ハツとなった。

「！？何っ……」

「フハハハハハハ。ザマあ見る！！

こいつらを殺すぞ！？若の友人だろ！？殺されたくなければオレを

……」

「キヤアアアア」

「……………」

光輝と有紀は、ガゴゼを哀れな目で見た。だって、そこにはすでに……。

リクオがガゴゼの顔にドスを斬りつけた。

「ヒイイイイイイ」

「若!?!」

リクオの行動に、本家の妖怪たちも驚き声を上げた。

「なんで…なんで…貴様のようなガキに…ワシの…ワシのどこがダメなんだー!?!」

リクオが斬りつけたところを、ガゴゼは痛い、痛いと言っている。

「妖怪の誰よりも恐れられてるといつのにー!?!」

ガゴゼはそう言う。

「(やるなあ…、リクオ)」

「……おにいさま?」

「ユキ、ホントの“恐れ”という意味が何か、わかるよ」

リクオが言う。

「子を貪り喰う妖怪…そらあ、おそろしいさ…。
だけどな…弱えもん殺して悦にひたってる、そんな妖怪が
この闇の世界で一番の“おそれ”になれるはずがねえ」

「!?!」

「情けねえ…こんなんばつかかオレの下僕しもべの妖怪どもは！
だったら…！オレが三代目を継いでやらあ…！
人にあだなすような奴あ、オレが絶対ゆるさねえ」

「若…」

「ひい~~~~いやだ~~~~」

「世の妖怪どもに告げる。オレが魑魅魍魎の主となる…！
全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ」

リクオはガゴゼを真つ二つに斬った。

「ガ……」

「畏」

その文字は

普通ではない者

「鬼」が「ト（むち）」を持つ

という意味の字

それはすなわち

未知なるものへの“感情”

「妖怪」そのものを表す

ガゴゼのような悪行も「恐れ」

巨大なモノに対する「おそ聳れ」

脅迫に対する「おそ怕れ」

支配に怯えるのも「懾れ」

だが

それは妖怪の一面に過ぎない

「すげえ…あんな小さいのに…」

「カツコイイ…」

「妖怪って…本当にいたんだ。あんなスゴイんだ…」

三人は呆然と吐く。

「この達磨…知っていたながら、今気付いた」

闇世界の主とは

人々に畏敬の念さえも抱かせる

真の畏れをまとう者であるよ

「さあ、ユキ。帰るか」

「そうだね」

その後、本家の妖怪たちの悲鳴が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2038ba/>

妖の世界 男主人公側

2012年1月6日14時46分発行